読書に関するエッセー入賞作品集 2021

テーマ 「無人島に１冊持っていくなら？」
または、あなたの読書法・読書論について

《小学生の部》最優秀賞

エルマーと動物たち

海蔵小学校　三年
佐野　雫

　む人島に着いたら、わたしはぼうけんをしようと思っています。だから、この本を読んでおいたら役に立つと思いました。そして、エルマーのように、む人島でのぼうけんを楽しみたいと思います。

　このお話は、エルマーがどうぶつ島をぼうけんするお話です。エルマーはどうぶつ島で色々な動物に出会います。ライオンやサイ、ゴリラなどです。エルマーは、リュックから動物がよろこびそうなものを取り出し、それぞれにプレゼントしていました。

　わたしが役に立ちそうだなと思ったところは、エルマーが人間とばれないようにするところです。どうぶつ島はとてもおそろしいもうじゅうたちがすんでいるので、人間だと気づかれるとおそわれてしまいます。だから、エルマーは動物から見つからないようにしたのだと思います。

　もしもわたしだったら、エルマーみたいに人間だとばれないようにします。たとえば、木にのぼってなまけものまねをします。ほかにも、木にぶら下がってサルのまねをします。こうすれば動物たちも気づかないと思います。いいことを思いついたなと思いました。

　わたしが好きな場面は、エルマーがりゅうをたすける場面です。どうぶつ島でさい後に会ったのは、りゅうでした。りゅうは空から落ちてきてケガをしてしまいました。そしてとぶことができなくなったのです。そんなりゅうをエルマーが見つけてたすけてあげました。

　わたしは、エルマーはやさしいと思いました。それにゆう気があるとも思いました。だって、いろんな動物がいるどうぶつ島を生きぬいて、一人でりゅうを見つけたのですから。そして、こまっていたりゅうもうれしかったと思います。

　わたしは、この本をむ人島に持って行って、役に立てたいと思います。エルマーのちえがいっぱいつまっている本です。

　たとえば、エルマーはサイに会ったとき、歯ブラシをあげました。サイは角がよごれて、きたなくなっていました。むかしはしんじゅのように白かったのだそうです。だからエルマーは歯ブラシと歯みがきこをリュックサックの中から出して、サイの角をみがいてあげました。角がぴっかぴかになってよろこんでいました。

　他にもライオンにはくしをあげたり、ゴリラには虫めがねを、とらたちにはチューインガムをあげて仲よくなっていました。わたしもエルマーを見習いたいと思います。そうすれば、む人島でも友だちが出来て楽しくなると思います。

　エルマーには、ちえやゆう気ややさしさがあると思います。わたしは、やさしくて元気で明るいと思います。エルマーとわたしでは少しちがうけれど、きっとわたしも、む人島でエルマーみたいにがんばってぼうけんできると思います。だってわたしは元気なのですから。

『エルマーのぼうけん』
（ルース・スタイルス・ガネット、福音館書店、一九八〇）

《小学生の部》優秀賞

ぼくのむ人とうものがたり

浜田小学校　二年
横山　智

　もし、大きなたい風がきて、ぼくとぼくの友だちがむ人とうにとばされたら、さいしょはこわいとか、さみしいとか思うと思います。しかし、しまにいろいろなさかなとか、虫とか、キノコや木のみや草花があったら、これをつかってあそべるのでわくわくすると思います。

　まず、うみや川でつりをしたり、貝とかサンゴとかをはまべでひろったりしたいと思います。ぼくは、四日いちのみなとでサバしかつったことがないけれど、む人とうならいっぱいさかながつれると思います。

　つぎに、山や森で虫とりをしたいと思います。ぼくのすきな虫は、カブト虫とカマキリです。む人とうでカブト虫やカマキリがたくさんとれたらうれしいと思います。

　そして、山や森に生えている木のみやキノコをとっておいしいりょうりを作ってみたいと思います。キノコを入れたちゃわ

んむしや木のみをつかったおいしそうなケーキを作ってみたいです。

こうやってむ人とうでくらすときに、もって行くといいと思ったのは『図かん』です。いっぱいさかなをつったときにどんなさかなかとかしらべられるからです。また、そのさかなにどくがあるかとか、おいしくたべられるとかがくわしくわかると思うからです。チョウチョウウオやカクレクマノミとかのかわいいさかなもすぐくわしく図かんでしらべられると思います。

それから、虫も図かんでくわしくしらべられると思います。カブト虫にもヘラクレスオオカブトやコーカサスオオカブトなどいろいろなしゅるいのカブト虫がいます。カマキリもチョウセンカマキリやハラビロカマキリなどいろいろなカマキリがいます。つかまえたら図かんでくわしくしらべたいと思います。そして、たくさんのしゅるいの虫をつかまえたいと思います。

こうやって、図かんでくわしくさかなや虫や草花をしらべながら、む人とうでたのしくかんさつやつりをしたいと思います。

《小学生の部》優秀賞

『エカシの森と子馬のポンコ』を読んで

楠小学校　六年
福井　美晴

私とポンコは似ている。自由に思いのまま行動している。ポンコは、好きな所へ好きなように手足に任せて歩いていた。私も同じだ。色々な所へ行き、たくさんの事を知りたい。みんなと同じではなく、自分自身の個性を大切にし、自由に生きたい。そう思う。

あらすじに「心が自由になる物語」とあった。私は「自由」という言葉が目に入ったと同時にこの本を開いた。理由は他にもある。興味がわいたからだ。なぜ自由になるの？森での生活でどう大人になるの？などと。

牧場から逃げ出したポンコには友達がいなかった。一人は寂しい。よく分かる。私には家族がいる。学校にはたくさんの先生や友達がいる。でも、一人で留守番をしている時は、静かで寂しい。ポンコはこのような気持ちがずっとなのだろう。私も早く誰かに会いたいと思う。お母さん達が早く帰ってきてほしいと思う。一人でいることはとても寂しい。だから、ポンコはエカシが頼りだったのだ。

ポンコは、どこへも行かないと強くエカシに宣言した。今、自分のそばにいてくれるエカシを大切にし、大切にされたい。それが幸せと思っていたからだ。気持ちは分かるが、私は違う。色々な所へ行くことで新しい世界を見付けられると思う。ふわふわたちが言っていた「わたしはわたし」「おれはおれ」は共感できる。なぜなら、世界に全く同じ人は一人もいないのだから。だから楽しい。

ポンコは自由そのものだった。心と体が一緒だった。しかし、ふわふわたちと出会い、エカシと話をし、カメムシにお母さんの話や牧場の事を聞いた。竜巻を体験し、冬のつらさや水の大事さを知った。一つ一つの出会いや会話、体験を通してポンコは変わっていった。心と体が違う方向へ向き、考えるようになり、自分の意志で進むべき場所を決めた。

この物語は「ポンコは走りだした」で終わっている。私は、男の馬の所へ走っていったと考える。決心し、エカシの元を離れ、牧場で男馬と一緒に暮らすのだろう。

こうしてポンコは大人になっていった。私も大人になりたい。一つずつ出来ることが増えることで大人になっていく。しかし、大人になると大変なことも増える。何事にも責任持って行動しなければならない。でも、大変な事も乗り越えて成長していきたい。ポンコにもそういう気持ちがあったのだろうか。心も体も変わっていく。考えて決めることが増えていく。それが大人になるということ。どう変わっていくのだろう。楽しみだ。

私は、ポンコから学んだことがある。足まかせでもいいが、時には立ち止まって考えてから決めること。何事にも疑問を持って考え、人の話をよく聞くこと。そして自分に正直になること。これら三つだ。私は、ルールがある中で自分が楽しいと思える行動を見付け出し、心の自由を持ち続ける大人になりたい。

この本を選んで良かった。今後、何かに迷った時にまた読みたい。

『エカシの森と子馬のポンコ』
（加藤多一、ポプラ社、二〇二〇）

《小学生の部》優秀賞

『わたしのカラス研究』を読んで

楠小学校　六年
竹野　遙人

私がこの本を選んだ理由は、最近子どものカラスを保護した事からカラスに興味をもったからです。

カラスはゴミを散らかしたり人をおそったりすることや、見た目や鳴き声のうるささから害鳥として人間から嫌われています。私も子ガラスを保護するまでは、あまり関わりたくないという印象でした。しかし、この本を読んでカラスはとても賢い鳥だということがわかりまし

た。

それではなぜカラスは人間が嫌がることをするのでしょうか。

まず、カラスが人をおそうのははん殖期がほとんどで、なわばりに人が近づいた時に攻げきすること、攻げきする前には葉をむしったり、ガーガーにごった声で鳴くなど、必ずいかく行動をします。このことから、カラスはヒナを守るために人をおそうと考えられます。

またカラスは雑食性で何でも食べると言われていますが、油の多い生肉やソーセージ、油あげを好むことがわかりました。自分の好きな食べ物をゴミのふくろから探し出すため、ゴミを散らかしている様にみえるのです。

カラスは知能も高く、外国の研究ではかたいクルミを道路におき、車にひかせてからを割るという行動もみられたそうです。

私はカラスも道具を使うことができる能力があるということにとてもおどろきました。

6月のある日、私の家の庭にカラスの子がたおれていました。足が悪いようでうまく立てず羽ばたいても飛ぶことができませんでした。

すぐ上の電線から親鳥らしい二羽のカラスがずっとカラスの子を見ていて、私が近づこうとすると鳴いていかくします。

二日たっても親ガラスは見守っているだけで、カラスの子はだんだん弱っていき息をするのがやっとという状態になりました。

私は母にたのんでカラスの子を保護し、市役所や県庁にどうしたら良いか問いあわせましたが、カラスは害鳥だからという理由で、保護してはいけないと言われました。しかし、このまま見捨てることができず、元気になるまでという条件で保護しました。

すっかり元気になったカラスの子はとても賢く紙で作ったボールでキャッチボールをしたり、えさを投げると空中でキャッチするなどおしえるとすぐに覚えます。またとてもきれい好きで、毎日水浴びをし羽のよごれを落とします。人を見分けることもでき、家族以外の人にはいかくするように鳴いたりします。

今はもう家にはいないけれど、カラスの子を世話したことで私の中のカラスのイメージが変わりました。

また人間の親子の様に愛情深い鳥だということがわかりました。

人間の都合で害鳥と決めつけるのでは無く、カラスも人間も住みやすく共存していける世界になると良いと思います。

『わたしのカラス研究』（柴田佳秀、さ・え・ら書房、二〇〇六）

《中学生の部》最優秀賞

『母を亡くした時、僕は遺骨を食べたいと思った。』を読んで

楠中学校　一年
芦原　あかり

この本のタイトルを目にした時、最初は「気味の悪いタイトルだな」と感じましたが、それと同時に、どんな内容なのかすごく興味がわき、読んでみることにしました。

この話は、著者の宮川サトシさんが、最愛の母を亡くした悲しみと、そこからの再生を描いた自伝エッセイです。明るく無邪気な性格で、誰からも愛されていた母が、突然末期の胃がんを告知され、二年の闘病生活の末、天国に旅立つ。母が旅立つ前後のサトシさんの思い出が、漫画でとても分かりやすく描かれています。この話を読んで、共感できる部分がいくつかありました。

私は、今年の四月、一緒に住んでいたおばあちゃんを亡くしました。私のおばあちゃんも、サトシさんのお母さんと同じ病気でした。おばあちゃんはいつも暇さえあれば畑仕事や家の掃除で動き回っていたので、まさか病気になるなんて思ってもいませんでした。だから、おばあちゃんの病気が分かった時も、おばあちゃんは絶対に元気になると信じていました。

サトシさんは、棺で眠っている母の顔をさわりながら、「子供の頃は　ゾンビとかキョンシーとか　死んだ人間の身体があんなに怖かったんだけど…」「実際は　全然怖くないんだな…」と書かれていました。私も全く同じ気持ちでした。棺で眠るおばあちゃんの顔は、元気な時と同じで、とても優しくて穏やかで、怖いなんて気持ちは少しもありませんでした。

もう一つ印象に残っているのが「亡くなった途端　母は僕の中で　アイドルにでもなったのか　遺影も指輪もまるで　ライブ会場でしか手に入らない　公式グッズのように　魅力的に見えたのです」という文章です。私も、サトシさんと同じように、おばあちゃんの持ち物一つひとつが宝物のように感じます。

おばあちゃんが忘れないように家族全員の名前と誕生日を書いたメモや、細かい字を見る時に掛けていた老眼鏡。仕事に必要な物の買い物リストのメモや大好きだった韓国ドラマのＤＶＤ等、おばあちゃんが元気だった時には何とも思わなかった物でも、今となっては大切な大切な宝物です。それを見るたびに、楽しかったおばあちゃんとの思い出がよみがえってきて、悲しくなって泣いてしまうこともありますが、大切にしてくれて有難うという感謝の気持ちも同じくらいあふれてきます。

全て読み終えて、サトシさんが遺骨を食べたいと思ったのは、今まで大切に育ててくれた母へのありがとうだけでは伝えきれない、心の底からの愛情表現なんだと感じました。私も、おばあちゃんには、感謝の気持ちでいっぱいです。

この話は、亡くなった大切な人への思いは、いつまでも自分の心の中にあり続けるという事を教えてくれたような気がします。

この話をたくさんの人にぜひ読んでみてほしい。そう思える感動の一冊でした。

『母を亡くした時、僕は遺骨を食べたいと思った。』（宮川サトシ、新潮社、二〇一八）